



HISTORY

日本医師会 女性医師バンク 12年の歩み

～それぞれが輝く未来に向けて～

日本医師会女性医師支援センター

ご挨拶



公益社団法人日本医師会
会長 横倉 義武

日本医師会女性医師支援センターは、厚生労働省からの委託事業として平成18年度に活動を開始し、平成19年1月に立ち上げました女性医師バンクは13年目に入っております。これまでご尽力いただいた先生方、並びに女性医師バンクのコーディネーターとしてご活躍いただきました先生方に改めて御礼を申し上げます。女性医師支援センター事業は、先生方に築いていただいた基盤をベースに、都道府県医師会のご協力をいただきながら、様々な女性医師支援事業を展開し、とりわけ中核事業であります女性医師バンクは、年々利用者が増加し、就業成立件数も順調に増えてまいりました。

一方では、女性医師支援事業にご協力いただいている先生方からは、今後は女性医師に限定せず、男女共同参画の観点から医師全体の支援活動を望む声も多く聞かれるようになってまいりました。

これも時代の要請と受け止めており、この冊子を通じ、女性医師バンクのこれまでを振り返り、ご尽力いただきました先生方に改めて感謝の意をお伝えするとともに、今後の女性医師支援センターの新たな事業展開を検討していく所存でございます。先生方におかれましては引き続きご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



公益社団法人日本医師会 女性医師支援センター
センター長 今村 聡
(日本医師会 副会長)

日本医師会女性医師支援センター事業は、女性医師バンクの運営のほか、この冊子では詳細について触れてはませんが、「医学生、研修医等をサポートするための会」や「女性医師の勤務環境の整備に関する病院長、病院開設者・管理者等への講習会」などを通じ、ワークライフバランス、キャリア支援などの活動を行ってまいりました。また、子育て中の女性医師の学習機会を確保するため、医師会が開催する講習会等に託児所の設置を支援しております。都道府県医師会のご協力により、女性医師支援に関するブロック会議を開催し、都道府県医師会の取り組みを共有することにより活動の輪を広げるとともに、大学医学部、医学会と合同で女性医師支援連絡会を開催し女性医師支援の情報共有、連携強化にも努めてまいりました。また、医師の働き方改革が進むなか、女性医師の活躍は不可欠の要素となっています。女性医師が働きやすい職場は男性医師にとっても働きやすい職場であり、その実現に向けて注力していく所存でございます。

今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

INDEX

目次

働く女性を取り巻く環境の変化と女性医師バンク	4
女性医師の働き方に関するアンケート	6
女性医師バンクの活動を振り返って～元コーディネーター座談会	8
新体制の女性医師バンク	
専任コーディネーターを置きさらにきめ細やかなサポート体制へ	12
求職者支援事例	14
・復職支援1	
・復職支援2	
・継続就業支援	
・スキルアップ	
求人施設支援事例	22
・現在いる医師の出産・子育て1	
・現在いる医師の出産・子育て2	
日本医師会・都道府県医師会・行政の連携事例	24
提言「女性医師支援センター・女性医師バンクの振り返りと展望」	26

働く女性を取り巻く環境の変化と女性医師バンク

戦後、働く女性を取り巻く環境は大きく変化し、女性が仕事を続けることは一般的となりました。一方で、女性の社会進出が進むことによって、子育てと仕事の両立支援や、男性を含めた働き方の見直しなどが求められるようになります。

このことは医師にとっても例外ではなく、そのような風潮のなかで事業を開始したのが日本医師会女性医師支援センターおよび日本医師会女性医師バンクです。

参考文献：厚生労働白書、男女共同参画白書、『女性の働き方』武石恵美子、『働く女性とマタニティ・ハラスメント』杉浦浩美

1960年代 働く女性の増加

女性の職域が拡大し、女性のみでの結婚退職制度や男女別定年制が女性差別だとして問題になりました。

1970～1980年代 男女平等への動き

国際的に男女平等を求める動きが広まり、これまでの「女性の保護」から「働く機会や待遇の平等」へと考え方がシフトしました。

1990年代 少子化の進行

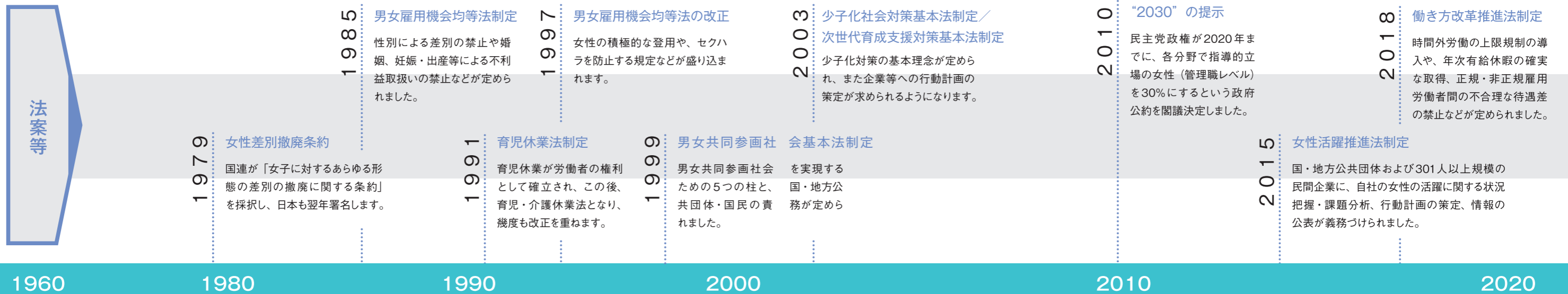
女性の社会進出が進む一方、少子化が進行し、女性が働きながら子どもを産み育てられる環境整備が求められるようになりました。

2000年代 男性も働き方の見直しを

少子化に危機感を覚えた政府は、「子育てと仕事の両立支援」に加え、「男性を含めた働き方の見直し」、「地域における子育て支援」を掲げます。「ワークライフバランス」という言葉が市民権を得て、皆が両立を意識するようになってきました。

2010年代 働き方改革の推進

「少子高齢化に伴う生産年齢人口の減少」、「育児や介護との両立など、働く人のニーズの多様化」などの課題を解決すべく、働く人の個々の事情に応じ、男女ともに多様な働き方を選択できる社会を実現しようという動きがみられるようになりました。

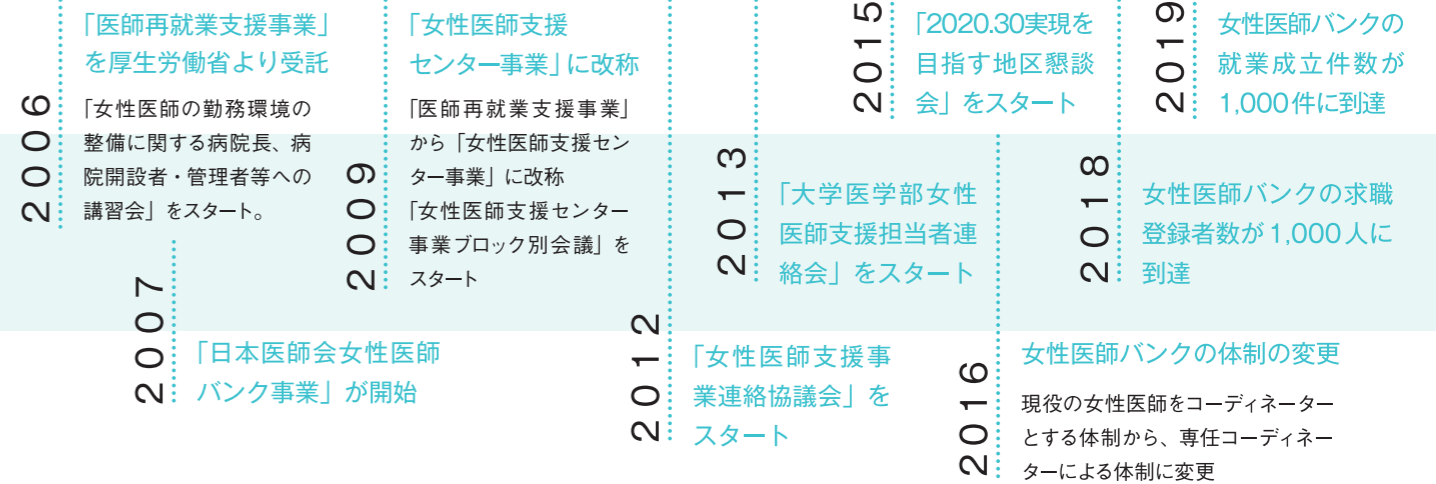


女性医師支援センターと女性医師バンク

女性医師バンクの概要・特徴

女性医師バンクは、厚生労働大臣の許可を受けて行う職業紹介事業（厚生労働大臣許可 13-ユ-301810）であり、女性医師に関するデータベースを構築するとともに、女性医師の採用を希望する医療機関の情報収集を行い、女性医師に対して就業希望条件にあった医療機関を紹介し、就業の支援や就業後の支援を行うことを目的としています。

- ①日本全国、日本医師会会員でない方もご登録いただけます。
- ②専任コーディネーターが求職者一人ひとりの状況に合わせた求人をご紹介します。
- ③医師のアドバイザーが専門的な相談にも対応いたします。
- ④登録料・紹介手数料等、費用はすべて無料です。
- ⑤就業後のご相談も承っております。
- ⑥復帰に向け再研修が必要な方には、研修可能な施設をご紹介します。



女性医師の働き方に関するアンケート

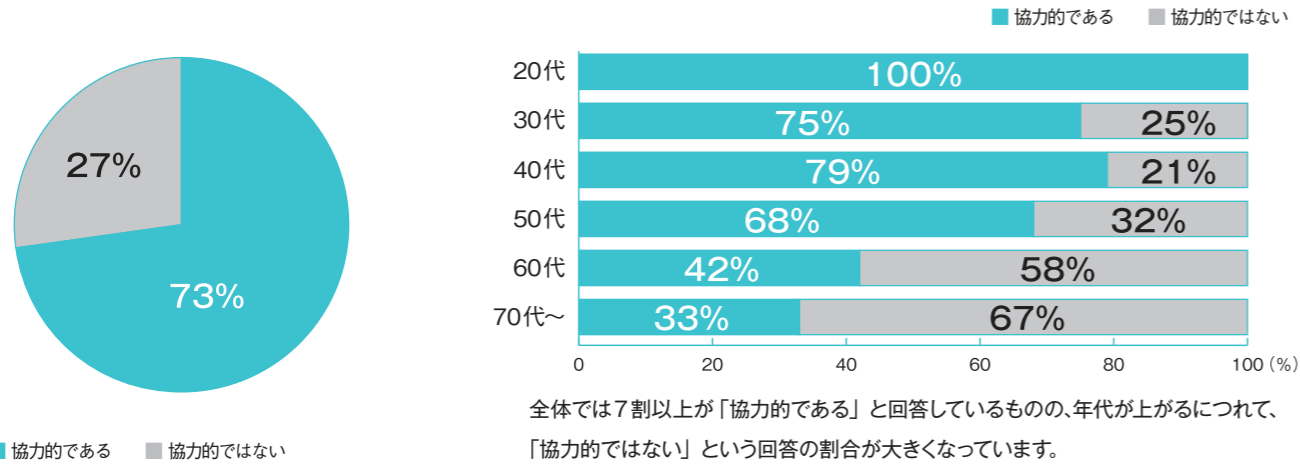
女性医師バンクに登録している求職者に、働き方に関するアンケートを行いました。

【調査概要】

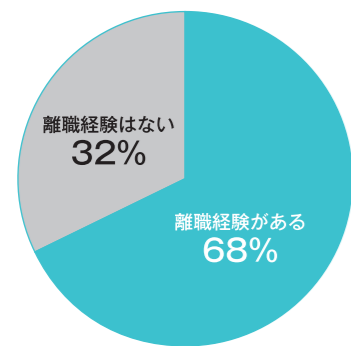
- 調査期間：令和元年10月11日(金)～令和元年11月5日(火)
- 調査方法：女性医師バンクに登録されている求職者約1,200名にメールで依頼（WEBのアンケートフォームにて回答）
- 回答数：351件

● 年齢							● 配偶者の有無	
20代	30代	40代	50代	60代	70代～	配偶者あり	配偶者なし	
2%	23%	44%	24%	6%	1%	76.7%	23.3%	

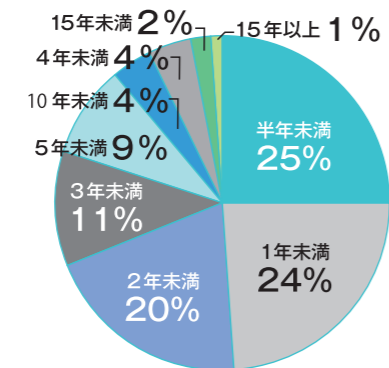
... Q1 ... 配偶者の育児・家事の協力（年代別）



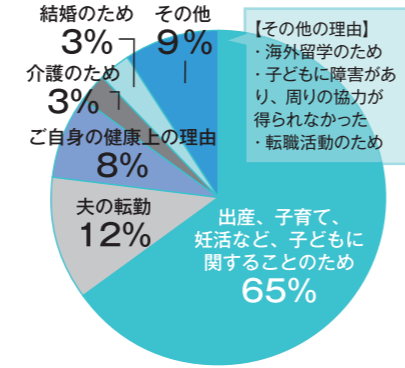
... Q2 ... 離職の経験の有無



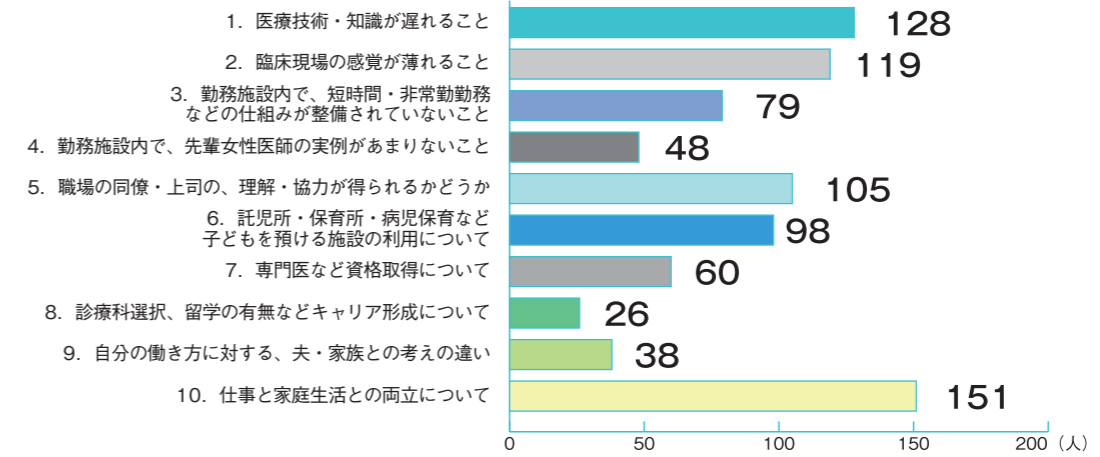
... Q3 ... 離職期間



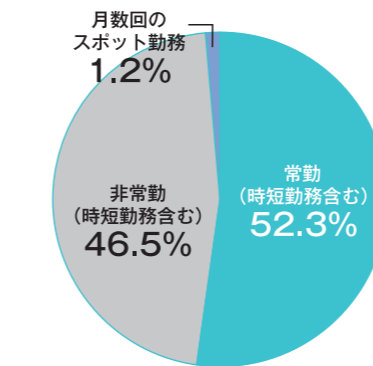
... Q4 ... 離職の理由



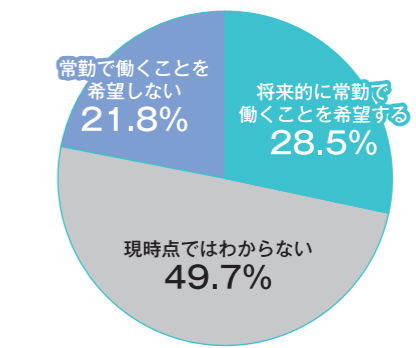
... Q5 ... 出産後の働き方について不安に思われること、また出産経験のある方は実際感じたことを三つまでお選びください。



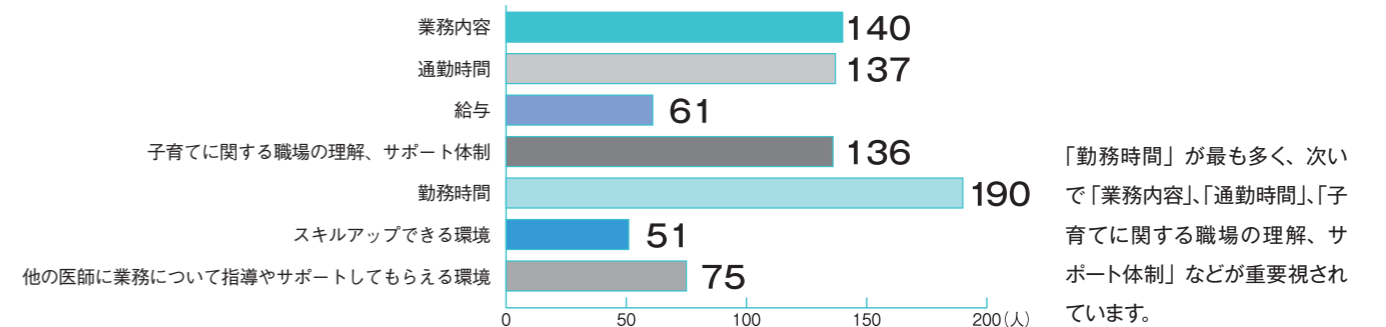
... Q6 ... 現在の勤務形態



... Q7 ... 今後、常勤での勤務を希望されますか。（非常勤、スポット勤務の方のみ回答）



... Q8 ... 勤務先を探す際の希望条件について優先する項目を三つお選びください。



女性医師バンクの活動を振り返って

女性医師バンクでコーディネーターを務めた6名の女性医師に、活動を振り返っていただきました。



【参加者】(左から)

檜山 桂子
渡辺 弥生
鹿島 直子
秋葉 則子
齊藤 恵子
猪狩 和子

MEMBER...

■ コーディネートは人生相談

—まず、先生方が女性医師バンクに関わるようになった経緯や、印象に残っている事例などをお教えてください。

秋葉：私は設立当初からコーディネーターを務めてきました。最初はどうやって電話をかけるかさえもわからないし、1件成立させるのも本当に大変で、この先どうなるのかと不安に思いながらの立ち上げでした。ですが、12年もこの事業が続き、また就業成

立数も1,000件に達したということで、私たちが頑張ってきた意味もあるのかなと感じています。

振り返ってみると、コーディネートは人生相談のようなものだったと感じます。自宅から求職者の先生に電話をかけると、電話口のすぐ傍で赤ちゃんの声が聞こえたり、主人に「いつまで電話しているんだ」と怒られたりもしました。そんななかで一人ひとりとコンタクトを取っていたことが印象に残っています。うまくいかなかった事例も経験しま

したが、重要なのは、その後も継続して医療現場で働いていただくことだと思っています。そのためにも、一人ひとりに丁寧に接することが大切なのではないかと思います。

鹿島：私が女性医師バンクに関わるようになったきっかけは、先輩方からある日突然お声がけをいただいたことでした。それまで臨床一筋で、恥ずかしながら医師会のことも知らなかったですし、女性医師支援が必要だという認識もありませんでしたが、その時から女性医師バンクのコーディネーター

と医師会の仕事を同時に始めることになったのです。

私たち女性医師が、医師の仕事をしながらコーディネーターを務めることには限界もあったと思います。けれど振り返ってみると、医師だからこそできたことも多かったと感じています。例えば、ブランクがあってトレーニングが必要な先生の復職をお世話する際には、縁故のある大学病院の学部長や県立病院の院長に直接電話をしておりました。また、県外の病院に就業希望の先生をお世話する際には、その県の医師会に声をかけ、ご協力をいただきました。求職者の先生から相談を受け、医師のお仲間として話をしてきた、という感じでした。

齊藤：私も初期から関わらせていただき、東北・北海道を担当しました。この地域は求人は多いですが求職者が少なく、また広範な地域ということもあり、なかなか就業が成立しませんでした。ただ、こういう活動をしていることが徐々に知られてくると、個人的に相談を受けることが増えてきました。ご主人が急逝し、4人の子どもの育てな

継続して働いていただくために
丁寧に接することが
大切だと思います

秋葉 則子



域の制度を変えるという役割が巡ってきたと感じています。背景を整えることによって、女性医師が働きやすい環境を築いていけたらと思います。

猪狩：私も先輩方からお声がけいただいて、女性医師バンクに関わるようになりました。当時、コーディネーターとして各地方から素敵な女性医師の方々がいらっやして、とても楽しくお仕事をさせていただいたことを覚えています。

お子さんの預け先を見つけて復職された事例。4人のお子さんを育てながら働くことに後ろめたさを感じていた先生が、今や海外などで講演されるようになった事例。どの先生方も、「あの時女性医師バンクの支援があったから今がある」と言ってくださいます。**渡辺**：私も先輩方に電話をいただいて関わるようになり、色々ご指導いただきながら、何とか一人前になりました。

印象に残っているのは、麻酔科で研修された先生の事例です。ご主人が眼科医院を継ぎ、しばらくは医師をやめて経営の仕事をしていましたが、眼科医として再出発したいと相談に来られました。科を変わるとなるとやはり大変で、どこからも断られました。最終的には大学の研修センターにお願いし再研修をされ、今は眼科医として活躍されています。

私が主に担当していた兵庫県は、面積が広く、かつ都会と過疎地の格差が大きい地域です。ベビーシッターなどのサービスも、過疎地ではほとんど利用できません。こうした格差は、女性医師支援の一つの大きな問題だと思っています。

檜山：この中では私が一番新参者で、皆様に色々教えていただきました。私がコーディネーターになった時は、地元の広島に先輩のコーディネーターが既にいらしたので、私は四国の担当になりましたが、かなり苦労しました。土地勘も、病院長などの面識もなかったためです。ただ、広島では私が女性医師支援をしているということを知っていたので、個人的に相談を受ける

求職者の先生から相談を受け
医師のお仲間として
話を聞いてきました

鹿島 直子



が働かなければならなくなった方の相談に乗ったり、ご主人の家庭内暴力のために働けない方を女性弁護士に紹介し、離婚が成立したこともあり。またこれ以降、岩手県のDV防止対策や、県医師会の女性医師支援にも携わるようになりました。

コーディネーターとしての就業成立数はあまり多くありませんでしたが、結果的に地

印象に残った事例は、いずれも人生相談だったと感じます。研修医の時に予定外に妊娠し、泣きながら途方に暮れていた先生が、常勤でお仕事をされるようになった事例。ご自身の病気で研修を受けられなかった先生を検疫所や少年院、保健所などに紹介し、立派にご活躍された事例。ご主人の転勤で産休明けに東京に来られた先生が、

元コーディネーター 座談会

ようになりました。その相談を女性医師バンクにつなぐことで、スムーズに就業を成立させることができました。お互いに信頼関係があることが、コーディネートには非常に有効だということを実感しました。

また、私が実現できたと感じているのは、大学と学会、医師会のコラボレーションです。大学の医局は人事権があり、学会には発信力があります。そして医師会には人と予算があります。これらがうまく融合すれば、女性医師支援をより推進することがで

公的な施設への医師の紹介も 行政と連携して 積極的に行ってほしいです

猪狩 和子



立ち上がりました。このコラボレーションが実現したときには、本当にうれしく思いましたね。

■ 女性医師支援を推進していくために
— 今後も、先生方がこれまで大切にされてきたことを引き継ぎ、より良い支援を続けていきたいと考えています。そのうえで、どのような点に気をつけるべきか、ご意見を頂けたらと思います。

齊藤：猪狩先生が少年院の矯正医官の仕事を利用者に紹介されたとのことですが、私も刑務所の仕事を紹介した経験があります。話によると、まだまだそういった施設で働く医師は足りていないとのことでした。定時で帰れて、土日にも休むことができ、かつ他での研修も可能ということで、子育て中の女性医師が活躍できる職場だと思います。今後はぜひ、紹介に力を入れていただけたらと思います。

猪狩：確かに、刑務所や少年院、保健所、

女性医師が働きやすい環境作り には、医師と医学生との交流が 有効だと思います

齊藤 恵子



きるのではないかと考えました。そこで、私がコーディネーターに就任した直後の日本内科学会で、学会の女性医師支援ワーキングと、女性医師バンクのコラボレーションブースを企画しました。学会の場で復職相談を行い、男女共同参画についての講演も行いました。積極的な広報の成果もあり、会場は大盛況でした。この企画を評価いただき、3年目以降は日本医師会が10を超える学会で復職相談を行うことになり、さらに次の年からは、学会と大学と日本医師会の男女共同参画担当者による連絡協議会が

家事や育児の分担など 体験談を聞く機会が増えれば 意識改革につながると思います

渡辺 弥生



大学の医局長や教授にも 女性医師バンクを活用して いただきたいですね

檜山 桂子



検疫所などの公的な施設への紹介は、医師会が担うべきなのではないかと思います。女性医師バンクを知らない施設もあるので、積極的に行政と連絡を取り、周知していくのが良いのではないかと思います。

鹿島：女性医師の活躍のためには、これからは乳幼児保育や病児保育だけでなく、学童保育を充実させていかなければならないと思います。もちろん同時に、男性医師の家庭への参画も必須です。

渡辺：兵庫県には、講演会でご主人と家事や育児をどのように分担しているのかを具体的に話される女性医師がいます。「そういうこともできるのね」と実感できるので、意識改革につながります。こうした講演を、医師会や大学のフォーラムなどでも増やしてほしいと思います。

齊藤：岩手医科大学では、県内の女性医師と女子医学生の交流会を行っています。そこには学長や各教授、男子医学生なども参加して、「女性医師と結婚したら、家庭ではどうするべきか」といった議論を行っています。この会は日本医師会から援助が出ていることもあり、うまくいっているようです。こうした情報交換の場を作るうえで、日本医

師会のバックアップは非常に大事だと思います。

檜山：大学の医局長や教授に、女性医師バンクを活用していただくための工夫も必要だと思います。産休・育休明けの女性医師からは、「医局からは離れずに、少しずつでも働きたい」という声をよく聞きます。子育ての時期など働くペースを少し抑えたい時期でも、短時間だけでも働いた方が医局への復帰も早くなりますから、医局にもぜひ女性医師バンクを活用していただけたらと思うのです。医局人事と女性医師バンクは決

して競合するものではなく、むしろ協力関係だということ、人事権を持つ方たちに知っていただかなければと思います。

秋葉：そのためには、例えば都道府県医師会の理事を務める大学の先生に、積極的に旗振りをしていただくような働きかけが必要ですね。

猪狩：今後も女性医師支援を推進していくためには、各大学と医師会とのパイプを作っていく必要があると思います。これからの取り組みに期待しています。

— 本日はありがとうございました。

注：本冊子を作成するにあたり、コーディネーターをお務めいただいた先生方に「印象に残るコーディネート事例」のご紹介をお願いしました。この座談会は、事例をご紹介いただいた先生方にお集まりいただき、開催されたものです。



矢野 隆子

私が印象に残っているのは、「不妊治療専門クリニックに勤務しているが、どうしてもお産を扱いたい」という相談を受けた事例です。当時、女性医師バンクの求人には適当なポストがなかったので、知り合いの産婦人科の先生の紹介で、公的病院での職を探しました。

面接日が決まった頃、求職者の娘さんが重篤な病に倒れられ、どうなることかと心配しましたが、あらゆる手段を使って困難を乗り越り再就職され、その後産科部長になられました。精神的なサポートを続けられたのも、女性医師バンクのおかげだと思います。

MEMBER...

歴代 コーディネーター

秋葉 則子
猪狩 和子
池田 俊彦
井之川 廣江
上田 真喜子

小栗 貴美子
鹿島 直子
家守 千鶴子
川上 順子
神崎 寛子

小栗 裕成
後藤 節子
齊藤 恵子
佐藤 薫
清水 美津子

高橋 克子
中川 やよい
檜山 桂子
福下 公子
藤井 美穂

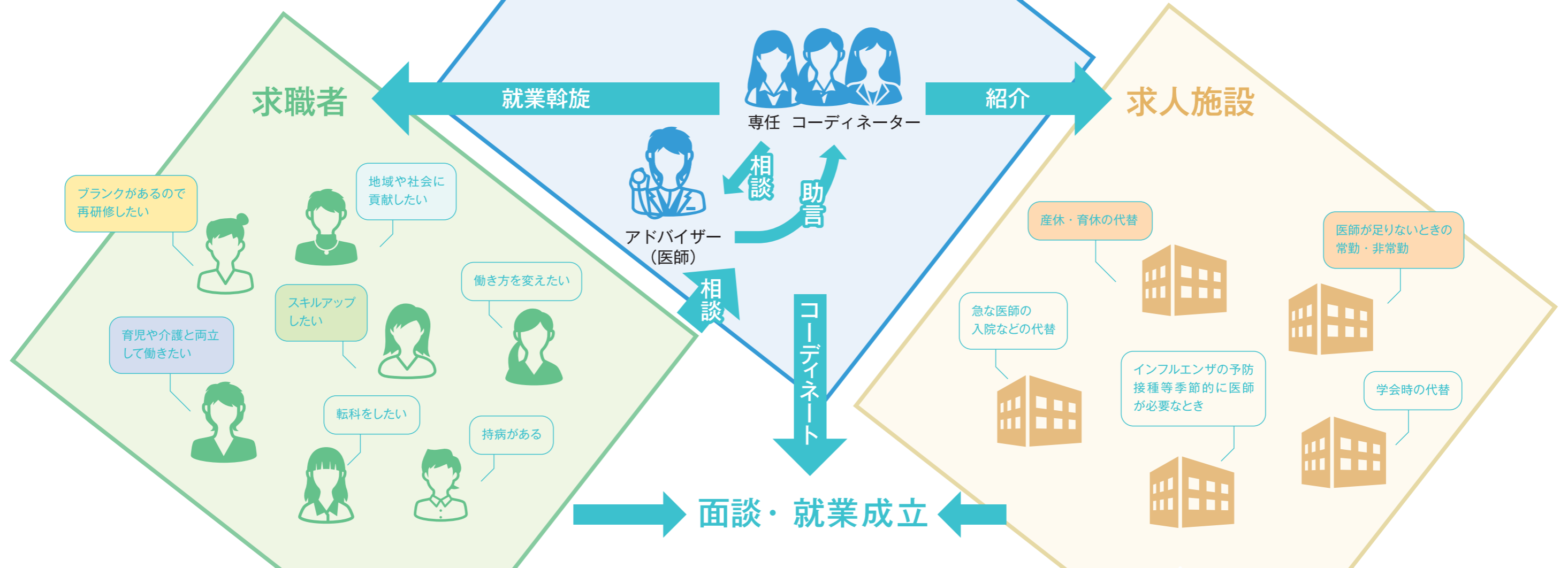
保坂 シゲリ
丸田 桂子
宮地 千尋
村岡 真理
矢野 隆子

温泉川 梅代
渡辺 弥生
(50音順)

新体制の女性医師バンク 専任のコーディネーターを置き さらにきめ細やかなサポート体制へ

日本医師会女性医師バンクは、かつては現役医師がコーディネーターを務めていましたが、よりきめ細かいサポートを行うべく、2016年に体制変更し、現在は専任コーディネーターがサポートを行っています。以後、女性医師の先生方にはアドバイザーとして関わっていただいています。

日本医師会女性 医師バンク



▶ 復職支援 (女性医師)

出産・育児を機に離職され、プランクのある先生も少なくありません。そういった先生方が再研修できるような支援を行っています。



P.14

▶ 継続就業支援 (女性医師)

育児や介護をしながら、細々とでも勤務を続けていきたいという先生も多くいらっしゃいます。無理なく継続して働ける施設を紹介しています。



P.18

▶ スキルアップ (女性医師)

子育てがひと段落し、これから医師としてスキルアップを目指したいという先生の就業支援もを行っています。



P.20

▶ 求人施設 (病院・クリニック)

開業医の先生の代診を務められる先生や、休暇に入った勤務医の代替医師を務められる先生などをご紹介します。



P.22

子どもの疾患で4年間の離職。
復職の不安は大きかったですが、
安心して働ける職場に出会えました。



PROFILE...

柴田 裕美

【略歴】

- 2011年(24歳):大学卒業後、大学病院の腫瘍内科で臨床研修。学生時代に結婚していた。
- 2013年(26歳):臨床研修終了後、市立病院の腫瘍内科で後期研修。
- 2014年(27歳):第一子を妊娠し、産休に入る。妊娠8か月のとき、子どもの心臓に病気があることがわかる。
- 2015年(28歳):育休中、上司に復職が難しいと報告。
- 2016年(29歳):第二子出産。その後、夫の勧めで女性医師バンクの存在を知り、登録。
- 2018年(31歳):児玉診療所で研修開始

■女性医師バンクに登録したきっかけ

—先生のこれまでの経歴を簡単に教えてくださいませんか。

柴田(以下、柴):私は学生時代に結婚していて、いずれ子どもができて働き続けたいと考えていました。その旨は研修先の上司にも伝えており、上司も理解してくださっていました。ですが、研修4年目に妊娠し、子どもに心疾患があるとわかったことが転機になりました。子ども中心の生活をせざるを得なくなり、上司にも職場復帰が難しいことを伝えました。産後は4年ほど仕事から完全に離れ、その間に二人目の子どもも生まれました。

—女性医師バンクを利用されたきっかけを教えてくださいませんか？

柴:上の子が少し落ち着いて、復職を考えた時に、夫が勧めてくれました。「子育て中の女性医師を主に支援しているところだし、医師会が運営しているから信頼できる」と言われ、ホームページを覗いてみたら、良い求人がたくさんあったので、登録することにしました。

—復職にあたって、どのようなことを重視されましたか？

柴:一人で外来診療を行うのが不安だったので、そうでない職場を第一条件に探していただきました。ブランクの期間が長かったので、復職にあたっては主に生活習慣病などの内科疾患について教科書やガイドラインで勉強しました。国家試験の前よりも勉強しましたね(笑)。

紹介していただいた現在の職場は、困ったときのサポートが充実していると感じます。日頃から相談できる先生がいますし、何かあったときには系列の病院の先生に相談することもできるので、とても安心して働くことができています。

現在はこちらで週2日の外来と、もう一つ別の診療所で週1日の外来を行っています。どちらも午前だけなので、子どものお迎えにも無理なく行けています。就業時間も含め、さまざまな支援を得られる環境で働けているのは本当にありがたいですね。

■子育てとキャリアの両立

—子育てとキャリアの両立について、どのようにお考えですか？

柴:大学の先輩だった夫とは、家事も子育ても協力して共働きをしようというスタンスでいました。ですが、一人目の子どもが疾

患を持って生まれてきたことで、私も夫も働き方を変えざるを得ませんでした。私は子育てに専念し、耳鼻科の勤務医だった夫は、定時で帰れる生命保険会社の社医に転職しました。以来、夫はフレックスタイム制を利用して子どもを幼稚園に送ってくれたり、病院に連れて行ってくれたりしています。

私自身は、あの時は仕事を辞めるしか選択肢がありませんでしたし、結果的にそれで良かったと思っていますが、ブランクを経て復職するときの不安はやはり大きかったです。もし仕事に戻りたいという気持ちがあるなら、細々とでも働き続ける方が良いのかもしれないですね。

ただ、子育てしながら働き続けるためには、周囲の協力が不可欠だと感じます。私たちの両親はどちらも遠方で、支援を得ることはできません。夫はとても協力的で、家事や子育ての半分を担ってくれていますが、それでもしばらくは夫婦共にフルタイムで働くのは難しいと思います。同年代の女性医師でも、子育てをしながらフルタイムで働いている人は少ない印象ですね。

■今後の目標

—今後の目標や、新たに興味が出てきたことなどはありますか？

柴:私はもともと緩和ケアに関心があったこともあり、今は在宅医療にも興味があります。診療所にいると、生活習慣病のコントロールが必要な方や認知症の方など、在宅医療に至る以前の方を診ることも多いので、まずはそういう方への介入を学んでいけたらいいと思います。今は本当に、「医師とし

てもっと働きたい!」という気持ちに溢れています。

—女子医学生や若手の女性医師にメッセージをいただけますか？

柴:仕事も、女性としての幸せも、諦めないでほしいと思います。無理にどちらかを選ばなくても、バランスを探りながら働くことはできますから。周囲に迷惑をかけると思ってしまう気持ちもわかるけれど、大変なときは色んな人の力を借りて、なんとか乗り越えてほしいです。きっと、巡り巡って恩返しできる日が来ますよ。

■女性医師バンクに期待すること

—今後、女性医師バンクに期待することがあれば教えてください。

柴:私のように、復職に不安を抱えている人は多いと思うので、手技や外来の練習ができるブラッシュアップセミナーのようなものがあると、安心できるのではないかと思います。インターネット講座だと、参加もしやすいと思います。

また、医師の働き方改革への支援も進めてほしいです。これからは女性だけでなく、男性でも子育てや介護、自身の病気などで、仕事をセーブせざるを得ないケースが出てくるでしょう。そういう方が全く働けなくなれば、マンパワーは不足してしまいます。ですから男女問わず、臨機応変な働き方ができるようになればいいと思います。女性医師バンクにも、女性に限らず医師全体を支援していただけたら、医療の未来はもっと明るいものになるのではないかなと思います。



ブランクばかりで学べなかった私。
再研修先では基礎からしっかり
教えていただけて感謝しています。



■ 就業した感想と今後の目標

—現在の診療所に就業してみて、いかがですか？

堀：これまで様々な病院で単発的に診療を行ってきましたが、「適当でいいから」と言われることがとても多かったです。あまり根を詰めなくていいよという、良い意味でのアドバイスだったのかもしれませんが、私は不安を感じていました。他の先生方はちゃんと勉強してキャリアを積み、立派に仕事をされているのに、自分はブランクばかりで勉強も経験も積んでいなくて、「このままでいいの？」という思いを常々抱いていたんです。それに対してこちらの院長は、基本的に忠実に一から教えてくださいました。必ずカ

ルテを見ながら復習する時間を設け、考え方をしっかり教えてくださいました。

また、院長は市のネットワーク事業や在宅高齢者医療のシンポジウムにも関わっていらっしゃるなど、幅広い知見をお持ちなので、多くのことを学ばせていただいています。スタッフを定時に帰す方針にも、とても助かっています。現在、私は週2日の外来と、在宅・施設への訪問を3件ほど担当しています。空き時間にはなるべく最近の医学書などを読んで勉強しています。

—今後の目標をお聞かせください。

堀：私の実家は産婦人科の開業医で、寝る間も惜しんで働く父の背中を見て育ったので、そういう姿に憧れがありました。院長にも、どことなく父に重なる部分を感じます。私

も父や院長のように、町の人をしっかりと診られる医師になりたいと思います。そのためにも、今後も真面目に勉強を続けていきたいですね。

—最後に、女性医師バンクに期待することがあれば教えてください。

堀：私が院長と出会えたように、基礎からしっかり教えてくださる先生のいる施設がもっと増えたらいいなと思います。

私はもともと体力がないうえに、支援を得られる環境にもいませんでした。世の中、タフな人ばかりではありません。体力がなくて、支援が得られない人でも、少しずつでも働き続けることのできる社会になってほしいと願っています。それぞれの事情にあわせた多様な働き方への支援を、これからも期待しています。

■ 女性医師バンクに登録したきっかけ

—女性医師バンクに登録するまでの経歴をお聞かせください。

堀江(以下、堀): 医学部卒業後に小児科医局に入局し、研修2年目に同級生と結婚しました。子どもを5人授かったこと、毎回つわりがひどかったこと、高齢の母の世話をしなければならなかったことなどから、医師としての一般的なキャリアを積むことができませんでした。夫の転勤先についていき、そこで仕事があれば何でも引き受けているうち、いつしか一般内科を診るようになっていました。

完全にブランクがあったのは、4人目出産後の2年間と、5人目出産後の6年間でした。その後、5人目の子が幼稚園の頃に親戚の医師からヘルプを頼まれ、再び少しずつ一般内科の仕事をするようになりました。そして、3年前に女性医師バンクに登録し、現在勤務する診療所を紹介していただきました。—女性医師バンクに登録したきっかけを教えてください。

堀：上の子二人が大学生になり、下も3人

控えていることから、学費のために働く必要性を感じたことがきっかけでした。また、当時子どもがかかっていた皮膚科の女性教授の存在も、身近なロールモデルとなりました。ちょうど「人生100年時代」と言われ始めた頃で、通院のたびに「あなたもこれからよ」と声をかけてくださっていたんです。子育てが落ち着いた後を想像したとき、家事や趣味だけをしている自分の姿はイメージできませんでした。いずれ子どもにお金がかからなくなっても、やりたいことができる自分でありたいし、大人になってきた子どもたちに、母親が将来を考える姿を見せたいという思いもありました。

そんな時、以前夫が女性医師バンクのパンフレットを持ち帰っていたことを思い出し、医師会なら安心と思って登録しました。医師会員でなくても登録できるので、気軽でした。実際に登録してみたら、求人がとても多くてありがたかったです。一度登録しておけば、メールで仕事を紹介していただけるのも便利です。定期的に連絡があって更新もスムーズにできますし、使いやすい印象です。



PROFILE...

堀江 節子

【略歴】

- 1994年：医学部を卒業し、小児科医局に入局。
- 1995年：同級生と結婚。循環器科の夫の転勤についていき、そこで仕事があれば引き受ける。
- 1996年：第一子を出産。その後、合わせて5人の子どもを出産。5人目が幼稚園に入った後から、親戚や知り合いの病院でスポット的に働く。
- 2017年：女性医師バンクに登録。どうたれ内科診療所で再研修開始。上二人が大学生になったこと、女性教授に励まされたことなどがきっかけで、再研修を志す。

50歳を過ぎてからの再研修は大変ですが、周りに助けられ、続けられています。

Aさん

(内科、50代)

私は子育て中、非常勤で働いたり、医療教育の現場で働いたりしていました。子育てが一段落し、今後再び医師として長く働いていきたいと思いましたが、臨床の現場からは20年以上離れており、知識も手技も古くなってしまったため、常勤でしっかり働くには再研修が必要だと思いました。

女性医師バンクの案内には「復職をお考えの先生には再研修先をご紹介します」と書いてありましたので、利用させていただきました。相談すると、専任のコーディネーターさんが丁寧に話を聞いてくださり、私の希望に合った職場をすぐに提案してくださいましたので、即決しました。女性医師バンクと医療機関の人事担当者の間には深い信頼関係があるようで、「女性医師バンクの紹介ですから大丈夫だと思います」と言っていました。

職場では、先生方やコメディカルの方々に温かく受け入れていただいています。指導医は素晴らしい先生で、周囲の優しさに心から感謝する毎日です。50歳を過ぎてからの勉強は大変ですが、ありがたいことに周りに助けられ、励まされながら、何とか続けられています。

今後は、まずは2年間しっかりと研修を行いたいと思います。その後、私を必要としてくれるような現場で長く働くことができれば、幸せだと思います。

私と同じように、様々な理由で臨床の現場から離れている女性医師は少なくないでしょう。ですが、その間の人生経験は、医師としての仕事にもきっと役立つと思います。女性医師バンクはきっと一人ひとりに合った職場を見つけてくれますから、ぜひお勧めします。

産後10年かけて常勤医に。
様々なご縁がつながって
今の私があると思っています。



■ 子育てとキャリアの両立について

—子育てとキャリアの両立についてどのよう
にお考えですか？

横：私自身は、基本的には子育て優先で、
一段落してから仕事をしようという方針でこ
こまで来ました。夫は家事・子育てに協力的
ですが、外部サービスに頼らず自分たち
で、という考えの人です。夫の両親の家とは
車で1時間の距離があったため、なかなか
頼れず、私が子育てにける時間はかなり
必要でした。でも、復帰については陰なが
ら応援してくれていました。夫の両親が市
内に引っ越して来て、子どもたちを見てく
れるようになり、上の子が中学生、下の子
も一人で留守番ができるようになったのを契
機に、

常勤に戻ることができました。

これまで、様々な場面で女性医師が挫折
してしまう事例を見てきました。無理して自
分を追い詰めて潰れてしまうよりは、働き方
を変えて、細々とでも働き続ける道を見つ
けたらいいと思います。

—今後の目標をお聞かせください。

横：この秋から外来長を任せられること
になりました。外来が滞りなく回るよう力
を尽かしています。また、若い先生と一緒
に学べるのがとても刺激になっています。私
が先輩方に教えていただいたことを若い先
生にも指導できればいいのですが、これか
ら少しずつできるようになりたいです。それ
から、たとえ仕事が忙しくても、家庭では
できるだけ笑顔でいられるようにしたいです。

—女性医師バンクに期待することがあ
れば教えてください。

横：私のように、出身県や卒業した大学と、
入局した県が違ったことで、働き方を見失っ
てしまう人は多いと思います。その点、県を
またいで対応してくださり、しっかりした働
き先を紹介して下さったこと、新しい縁を
作っていただいたことには本当に助けられ
ました。今後も、仕事の選択肢について困
っている人を支援していただけると嬉しいです。

日本医師会のことは知っていても、女性
医師バンクが日本医師会にあることを知ら
ない人は多いようです。働き方の選択肢が
色々あることを早くから知っていたら、将来
につながると思うので、ぜひもっと周知し
ていただけたらと思います。

■ 常勤医になるまでの経緯

—先生が産後10年かけて常勤医になら
れた経緯をお聞かせください。

横山(以下、横)：私は岡山県内の大学を卒
業後、実家のある他県の大学の皮膚科に入
局しました。大学院入学の年に結婚しまし
たが、夫は岡山県で勤務していたので、し
ばらく週末婚が続いていました。

大学院を修了した年に、34歳で第一子
を出産しました。専門医資格も学位も取れ
たので、いったん仕事は全てやめて岡山大
で生活するようになりました。

産後1か月から週に1～2回、実家の診
療所の外来診療はしていましたが、その後
仕事に復帰しようと考えた時、どこにも所
属していない私には岡山につががありません
でした。そんな頃、同門の先輩で医師会活
動を行っていた女性医師から女性医師バン
クを紹介されました。「登録だけでもして
おいたら、良い情報がもらえるかもしれない」と
勧められ、登録してみました。

その後父が倒れ、実家の診療所をフルで
手伝うようになったことと、二人目を妊娠し

たことから、本格的な復帰は見送っていま
したが、二人目の産後に女性医師バンク
を利用して、平島クリニックを紹介してい
ただきました。週3時間から勤めることにし、
実家での勤務も短時間ながら続けました。

平島クリニックの先生や紹介してくださ
った医師会の先生は熱心で、色々な勉強会を
案内してくださいました。そこで出会ったの
が岡山大学のMUSCATプロジェクトです。
MUSCATは、岡山県女性医師キャリアセン
ター運営事業として、広く岡山県で働く女
性医師のキャリア・復職をサポートしている組
織です。岡山大学皮膚科とMUSCATの共
同勉強会に参加させていただいたことを契
機に、私も岡山大学の復帰支援枠に所属し、
週4時間から勤めることにしました。子ども
の成長とともに勤務時間を増やし、2018
年に岡山大学の常勤医師になりました。

先輩や先生方に助けられ、ご縁がつな
がって今があることをありがたく思ってい
ます。また本当に短い時間から勤務を始め
られたことはとても良かったです。大学・ク
リニック・実家で週に数時間ずつ、無理なく働
くことができました。



PROFILE…

横山 恵美

【略歴】

- 1996年(24歳)：大学卒業後、他県の皮膚科医局に入局。
- 2001年(29歳)：大学院に入学。大学の同級生と結婚。
- 2006年(34歳)：大学院修了。第一子出産。学位を取り、常勤の仕事全部辞める。出産後、女性医師バンクに登録。実家の診療所で外来診療などを行う。
- 2009年(37歳)：第二子を出産。
- 2011年(39歳)：女性医師バンクの紹介で、平島クリニックで時短勤務を始める。
- 2012年(40歳)：岡山大学で週4時間から勤務開始。以後、子どもの成長に合わせて勤務時間を増やしていく。
- 2018年(46歳)：岡山大学の常勤医師になる。

いつか再び最前線で働きたいと
思いながら
週1日の勤務を続けています。

Kさん

(産婦人科、30代)

私は大学院の時に結婚、出産しました。
早期の仕事復帰を考えていましたが、子ども
にも重度の持病があり、研究を継続するの
は困難でした。途中で投げ出す形になるの
は申し訳ないと思いましたが、「仕事はこの
先いくらでもできるが、小さい命を支えるの
は今しかない」と、教授や医局長にも後押
ししていただき、子育てを優先することに
決めました。

細々とでも勤務し続けることが大切だと
思う一方で、子どものことを考えると急な
欠勤や早退が許容されることが必須でした。
また主人は多忙で、家のことは私が一手に
担う必要があったため、短時間の勤務を希
望していました。そこで私は、専門外来が
できる職場を自身で探しました。現在は自
宅近くのクリニックで週1日働き、他にも以
前の勤務先で分娩立ち会いや外来を月1回

程度行ったり、女性医師バンクからの紹介
でスポット勤務を行ったりしています。

もともと最前線でバリバリ働きたいと思
っていたので、その目標は今も心にあります。
できるかどうかわかりませんが、子育てが落
ち着いたら、周産期センターで働きたい、当
直もしたいと思っています。さらに、子育て
の経験を患者さんに還元できたらいいです。

配偶者の仕事、両親の支援、職場の状況、
仕事や子育てをどの程度していくのか…状
況や考え方は人それぞれです。ただ、いず
れまた医師として活躍したいなら、週1日
でも勤務し続けることは大切だと思います。
そのためには、託児所がある、急な欠勤に
対応してもらえるなど、無理なく勤務でき
る職場を見つける必要があります。女性医師
バンクには、ぜひその支援をしていただきた
いと思います。

子育てが落ち着き、再研修に挑戦。
コーディネーターさんに
背中を押してもらいました。



PROFILE

江口 幸子

【略歴】

- 1990年（22歳）：文学部心理学科を卒業し、民間企業に就職。
- 1994年（26歳）：医学部に入学。
- 2000年（32歳）：小児科医局に入局。約5年間、関連病院を回って研修を行う。この間に結婚。
- 2005年（37歳）：妊娠・出産。妊娠中に医局を離れる。出産後は、小児科クリニックの外来（週1～2日）や乳児検診を細々と続ける。
- 2016年（48歳）：女性医師バンクに登録。
- 2017年（49歳）：島田療育センターで勤務開始。

■ 女性医師バンクに登録したきっかけ

—先生のこれまでの経歴を教えてくださいませんか。

江口（以下、江）：私は文学部心理学科を卒業し、民間企業で4年間働いた後、医学部に再入学しました。卒業後は小児科医局に入局し、約5年間、関連病院を回って研修をしました。この間に、37歳で出産をしました。

妊娠中に医局を離れた後は、自分で日本小児科学会の求人にあたるなどして、小児科のクリニックでの外来を週に1～2日と、乳児検診を細々と続けてきました。せっかく研修したのに、仕事を辞めてしまうのもったいないですし、研修してくださった先生にも申し訳ないので、細々とでもいいから仕事を続けようと、ずっと思っていました。

—女性医師バンクに登録したきっかけを教えてくださいませんか？

江：子どもが中学1年生になった頃、テレビを見ている時間が増えてきたことに気付き、「これならもう少し働けるかも」と思いました。また、細々と続けていた小児科の外来で、発達障害のお子さんを持つ親御さんから相

談を受ける機会も増えてきて、児童精神科にも興味を持ち始めていました。そんなある日、テレビCMで女性医師バンクを知り、検索してみると求人がとても豊富だったので、登録することにしました。

—先生はご自身でお仕事を探された経験もお持ちですが、女性医師バンクの良かったところを教えてください。

江：コーディネーターさんがとても相談しやすく、悩んでいる私の背中を押してくれたことですね。現在の職場を紹介された時も、私の家から車で片道1時間かかるので、最初は躊躇したんです。でも、コーディネーターさんが「再研修もできますし、こんな良い求人はなかなかないですよ！思い切ってやってみましょう！」と背中を押してくれたことで、挑戦してみようと思うことができました。

■ 就業した感想と今後の目標

—実際に現在の職場に就業されてみて、いかがですか？

江：小児科での患者さんとの接し方と児童精神科での接し方は全然違うので、最初はとても戸惑いました。でも、先生方がとても親切で、私が困っているとすぐ声をかけて

くださいますし、本当に丁寧に教えてくださいましたので、見守られていると感じています。休憩時間中なども、質問したら申し訳ないと思いつつも、研修医に戻ったかのような気持ちでどんどん質問するようにしています。症例も、簡単なものから難しいものへと順番に経験を積ませてもらえるので、知らず知らずのうちにステップアップできていると感じますね。また、一緒に働いている先生方は、様々なバックグラウンドを持っている方ばかりなので、とても刺激になります。

—現在は外来診療をされていますが、今後の目標はありますか？

江：目標は、立派な児童精神科医になることですね。現在の職場には病棟はないのですが、いずれは病棟勤務もしてみたいと思っています。

また、「子どものこころ専門医」という専門医資格を取ることも検討しています。資格取得のために症例をまとめたりすることも、良い勉強になるのではないかと考えています。

■ 子育てとキャリアの両立について

—子育てとキャリアの両立について、どのようにお考えですか？

江：どういう個性の子が生まれてくるかにもよるかもしれませんが、誰もがうまく両立できるわけじゃないと思います。私の同期に、子どもがいるのを感じさせないくらいバリバリ仕事をしている女性医師がいたのですが、私は彼女のように両立できませんでした。

子どもが男の子で活発だったので、手がかかったし、PTAやクラブ活動の役員がひっきりなしに回ってきて、全然時間の余裕がありませんでしたから。

でも役員をやったことで、色々な子どもたちを見る機会があって、それは結果的に今の仕事にも活かしているんじゃないかなと思いますね。

—子育ての経験が仕事に活かしているということですね。

江：はい。それに自分が子育てをしたことで、子育て自体の印象も変化しました。よくお母さんから「周りの人は子どもと遊んで楽しそうなのに、うちの子は走り回って私は楽しめない。この子は発達障害なのではないか」といった相談を受けることがあるのですが、子育てってそういうものだと思うんです。「楽しまなければ」とか「もっと幸せなはずだ」という思いがプレッシャーになることもあります。そういう思いも理解できる医師になれたのは、子育ての経験があるからかもしれないですね。そして、少しでも親子がプレッシャーから開放されるような手助けができればいいなと思います。

—最後に、女性医師バンクに今後期待することがあれば教えてください。

江：子育てに限らず、医師本人が突然の病気や怪我で働けなくなることもあると思います。そういうときのバックアップを、女性医師バンクが支援してくれたらありがたいですね。



求人施設支援

現在いる医師の
+ 出産・子育て +

子育て中の医師を含め
女性医師同士で支え合っ
てクリニックを運営して
います。



■ 女性医師バンクを利用した感想

—女性医師バンクの利用に至った経緯を教えてください。

納：日本皮膚科学会の総会にブースがあり、登録だけしてました。ある時、私が体調を崩した際に相談したら、対応がすごく良かったんです。丁寧に話を聞いてくださり、手際も良く、助かりました。

—それ以前はどのように運営を？

納：前クリニックの院長の時から今のクリニックに移転する間に二児を出産し、開業医としての歩みと子育ての歩みがちょうど重なっているんです。ですから私一人で回すのは難しく、非常勤の先生方にいつもお世話になっていました。知人や後輩たちにヘルプをお願いしていたのですが、皆が同じようなライフステージのため、回しきれなくなっていたところでした。

—利用された感想は？

納：女性医師バンクからは、私と同じく子育て中の医師二人を紹介していただきました。誠実で、コミュニケーションも上手な方々です。自身で判断できない場合は近隣の大きな病院に送ってもらっています。私も二人から新しい知見を得るなど、お互いに勉強になっていますね。また、当クリニックの患者さんは女性や子どもが多く、女性医師の方がありがたいのですが、民間の紹介は男性医師のこともあり、その点も良かったです。

—先生の生活も変化しましたか？

納：はい。子どもの行事や習い事の他、医師会や勉強会などに使える時間が増えまし

た。また二人とは、保育園やシッター、家事代行サービスなど、医療以外の情報交換もしています。皮膚科の診療では、洗剤や化粧品などが症状に直接関わることもあるので、生活の相談をし合える関係が活かされていると感じます。

■ 子育てと開業医の両立

—子育てと仕事の両立について、どのようにお考えですか？

納：私も内科医の母の背を見て育ちました。子どもに寂しい思いをさせないようにしたい、また保険診療・自由診療それぞれの強みを活かして患者さんの環境を良くしたいと思い、開業しました。開業してみると、わが子が体調不良の時にクリニックに連れてくることもできます。また代診の先生の体調不良の時に私が代わるなどフレキシブルに対応できます。責任も大きいですが、皆子育てや家庭がある分、状況もわかり、ヘルプも出しやすいです。支え合いながら仕事ができています。

—今後、女性医師バンクに期待することはありますか？

納：病児保育や託児所などと提携して、割引などがあるといいですね。また短時間勤務のニーズにも応えてくれるとありがたいです。そして、医師にも多様な働き方があることを後進に伝えてほしいです。ずっと常勤で働けなくても、例えば手術だけを行う医師など、様々な働き方の医師が支え合うこともできるはず。今後も、様々な支援を期待しています。

求人施設支援

現在いる医師の
+ 出産・子育て +

産休・育休の際の代替医師を
紹介していただき、
助かりました。



医療法人社団 忠医会 大高病院

【施設情報】

- 理事長/病院長：大高 祐一
- 所在地：東京都足立区
- 開院：2013年
- 病院類型：一般病院/東京都指定二次救急医療機関
- 病床数：82床
- 診療科目：救急科・内科・循環器内科・小児科・脳神経外科・皮膚科・形成外科・美容皮膚科・リハビリテーション科・精神科（リエゾンのみ）

患者さん・ご家族の悩みを取り除くために救急医療を行い、人を支えていく病院です。①地域住民に対するアージェントケア ②二次救急のなかでも搬送困難になりやすい症例を積極的に受け入れる ③救命救急センターのバックベッドの役割を果たす ことで、地域への貢献を目指しています。



左：大高 祐一 理事長、右：松本 学 法人本部 本部長

■ 女性医師バンクを利用した感想

—まず、女性医師バンクはどのようにしてご存知になりましたか？

松本（以下、松）：ダイレクトメールで知り、登録料もかからないので登録だけしてました。今回、産休・育休が発生したため、代替医師の紹介を依頼しました。

—これまで産休・育休についてはどのようにご対応されておりましたか？

大高（以下、大）：当院は設立7年目で、医師の産休・育休取得は2回目です。前は院内の医師で業務を分担したのですが、今回はその対応が困難でした。

松：産休に入った先生は常勤の小児科医で、一人で外来を担当していました。復職意向もあるため、これ以上常勤医師を雇用するわけにもいかず、非常勤で短期間だけ働いてくれる方を探していました。

—女性医師バンクをご利用されてみて、いかがでしたか？

松：民間の紹介業者からもオファーはありますが、ほとんどが常勤の先生で、期間限定の先生を探すのが難しいんです。ですから大変助かりました。紹介手数料がかからないのも良いですね。

大：女性医師バンクに登録されている先生は、日本医師会のような公的なところと連絡を取ることを厭わない方ですから、しっかりされていて安心感がありました。

松：担当の先生が交替することで、患者さんが離れてしまうかもしれないという懸念もありましたが、そのようなこともなく、しっかり診ていただきました。

大：ご紹介いただいた先生は専門医資格をお持ちでしたから、安心して診療をお任せできましたし、何より患者さんやスタッフの話をしっかり聴き、コミュニケーションできる方で良かったです。

■ 現在の女性医師支援と、今後の展望

—現在、貴院ではどのような女性医師支援を行っていらっしゃいますか？

大：当院の医師は非常勤医師を含め約4割が女性で、子育て中の医師も多いため、週30時間の短勤務制度を導入しています。また院内保育所も併設しています。急な有給休暇の取得や欠勤についても、できる限り対応するようにしています。

松：今後も、よりワークライフバランスを保ちやすい職場にしていきたいですね。産休・育休以外にも、計画的な休暇の際の代替をお願いできれば、より働きやすい職場になるのではないかと思います。

—今後、女性医師バンクにはどのような支援を期待されていますか？

大：登録者数を増やしてほしいです。民間に登録する前にこちらに登録するような形になればいいですね。女性医師バンクを知らない先生もまだいらっしゃると思うので、ぜひPRしていただきたいです。

松：現状は登録者が女性医師だけのため、診療科の偏りがあるのが気になりますが、今後、男性医師やシニア医師が登録されるようになれば、それも解消されていくのではないかと思います。当院には医師の定年はありませんから、元気な方なら、シニアの先生の勤務も歓迎いたします。

DATA

DATA

おさめスキンクリニック

【施設情報】

- 院長：納 さつき
- 所在地：東京都渋谷区
- 開院：2013年
- 設備：受付兼待合室・診察室2つ・施術室5つ・キッズルーム・パウダールーム
- 診療科目：皮膚科・美容皮膚科

小さなお子様から大人まで、ライフステージや環境によってお悩みはそれぞれだと思います。よく傾聴し、お肌環境を整えることによって、日常生活をいきいきと送れるよう応援したいと思っています。



日本医師会・都道府県医師会・行政の連携事例

医師不足の地域と女性医師バンク

北海道知事

北海道医師会長

鈴木 直道

長瀬 清

経緯

大阪府で開業医をしていた70代の男性医師から、「クリニックを息子に譲り、自身は無医村で働きたい」との相談が、日本医師会女性医師バンクに寄せられました。多様なキャリアや働き方を日本医師会として支援するという女性医師バンクの目的を踏まえ、女性医師ではありませんが、ご登録いただき、北海道医師会および北海道庁の医師確保担当部署と連携・協力し、ご希望通り北海道内の医療過疎地域での就業をコーディネートしました。

本事例は、日本医師会女性医師バンクに登録された医師が、都道府県医師会や行政と連携して、医師不足地域での勤務につなげた、初めてのケースでした。この事例について、北海道の鈴木知事と、北海道医師会の長瀬会長に対談形式で振り返っていただきました。

■ 北海道の医師不足の状況について

長瀬 (以下、長): まず、北海道の医師不足の状況について確認させてください。北海道全体でならして見ると、人口10万人当たりの医師数はほぼ全国平均並みですが、面積あたりでは全国最低です。また二次医療圏ごとに見ると、最多の圏域と最少の圏域では約4倍の格差があります。「絶対的不足」に加え、「地域格差の拡大」があるのです。

鈴木 (以下、鈴): 二次医療圏の間の医師の偏在は大きな課題ですね。2019年2月に国から示された暫定的な医師偏在指標では、道内21の二次医療圏のうち札幌市を含む札幌圏域と旭川市を含む上川中部圏域が全道平均を大きく上回る一方、道内の二

次医療圏の半数を超える11圏域が「医師少数区域」となっています。特に、根室・日高・宗谷圏域といった地域では、人口当たりの医師数が全道平均の半分以下しかいないのです。これらの地域は高齢化も進んでおり、医療ニーズも高まっています。地域の医療機関や市町村の方々から切実な声も頂いていますので、道としても何とか対応しなければなりません。

長: また近年は、一般住民の専門医志向もあり、症状に応じた専門医による診療が求められています。そのため、産科や小児科、眼科、耳鼻科等の専門医の不足・偏在も問題となっています。

このような状況のなかで、様々な施策が必要となっています。具体的には「道内で働



今回の事例で、
道と北海道医師会の
連携も一層深化しました

鈴木 直道

く医師をより多く養成する」「医師不足地域での研鑽の機会やワークライフバランスを確保する」「道内の医師多数地域から、医師不足地域へと医師を派遣する」「道外の医師に、道内の医師不足地域に来ていただく」といった施策が考えられます。

鈴: はい。道としても医師が不足している地域への医師派遣事業など即効性のある医師確保のほか、修学資金貸付制度や医師会との共催で将来の地域医療を担う青少年育成事業など、中・長期的な視点に立った対策を実施しています。今年度は医師確保計画を策定しますので、さらに一層、様々な施策に取り組んでいきたいと考えております。

■ 医師不足地域での研鑽の機会やワークライフバランスを確保する

長: 過疎地域や医師不足地域においても、研鑽の機会を十分に確保することや、ワークライフバランスを維持できる勤務環境づくりが必要になりますね。

鈴: そうですね。「地方に行く」と研修の機会が減少する。「医師が少ないため多忙になる」と考える医師の方々もいると聞いております。研鑽の機会が十分に確保されて、労働環境が良いことが医師の定着につながると考えます。道では代替医師の確保として、都市部にある民間の医療機関から医師を派遣する「緊急臨時的医師派遣」や、職場内に休暇制度等の相談窓口を設置するための支援にも取り組み、働きやすい環境づくりに努めているところです。

長: 北海道医師会では、道の女性医師等就業環境整備事業の補助金を活用して、相談窓口を設置し、出産・育児などの理由で職場を離れた女性医師の復職支援や継続勤務の支援などに取り組んできました。本年度より「女性医師等支援相談窓口」は「医師キャリアサポート相談窓口」に名称を変更し、育児・復職研修支援、無料職業紹介・相談窓口事業に加え、新たに全ての医師からのキャリア相談、医師が働きやすい環境の整備、定年退職後の医師の雇用継続などについて対応していく予定です。

また、医学生・若手医師を対象に世代を超えた交流を通じてネットワークを作り、医

師として働き続けることに対する意識や必要な環境整備などを学び、将来の離職防止を目的とするセミナーの開催などの事業にも取り組んでいます。

■ 道内の医師多数地域から、医師不足地域へと医師を派遣する

鈴: 道内における医師の偏在解消については長年の課題になっており、地域における医師の確保を道政上の最重要課題として位置付けて取り組んでいます。道では、道内三医大の設置するセンターからの医師派遣などを行っていますが、偏在は解消されていない状況です。地域での医師の確保は医大や医師会、関係する団体の方々のご協力がなければ進みません。

長: 北海道医師会では、無料職業紹介事

医師確保の一つのモデルとして 多くの方に知ってほしいですね

長瀬 清

最大限活用することが必要と考えていますが、医師確保の観点からも、道外の医師の招へいに今後力を入れなければならないと考えています。

長: その意味で、今回の事例を地域の実情に合った医師確保の一つのモデルとして多くの方に知っていただくことが、新たな医師確保対策のヒントになると思います。日本全国、広い範囲を網羅し、多くの求人登録がある日本医師会女性医師バンクと、地域の医師会が連携して「顔の見える地域のコーディネート機能」体制を確立することができれば、全国レベルでの求人・求職の情報に基づいて、都道府県の状況に合わせた就業斡旋が可能になると思います。

鈴: 全国レベルで医師登録を行っている、日本医師会女性医師バンクの協力を得られる



業を通じて、都市部で勤務する医師が、業務に支障のない範囲で週末などに地域の診療支援に従事できるよう医療機関を紹介しています。これにより、地域の先生方が休みを取ったり、研鑽に励んだりする機会を保障できます。

また、道内の病院勤務医の4割が50代以上であり、今後10年で多くのベテラン勤務医が定年退職をすることが見込まれています。定年退職後の医師に新たな活躍の場を紹介することも、医師の偏在解消の一つの施策になり得ると考えています。

■ 道外の医師に、道内の医師不足地域に来ていただく

鈴: そして最後に、道外から医師に来ていただくという施策です。私も「ほっかいどう応援団会議」を立ち上げるなど、道外の力を

ことは大変ありがたいです。
長: 日本医師会も今後は「シニア医師支援」などトータル的な就業支援体制を構築し、女性医師バンクの体制変更を検討しているとのこと。北海道医師会が、全国ネットである日本医師会女性医師バンクとしっかりと連携することにより、北海道に移住を考えている医師への支援もできるものと思います。

鈴: 今回の事例が全国で初めての取り組みとなることは、とても喜ばしいことであるとともに、道と北海道医師会の連携も一層深化したと感じています。今後もさらに協力体制を強化し、多くの事例と一緒に積み上げていきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

また、日本医師会女性医師バンクの機能の充実にも期待しております。

提言

■ 女性医師バンクへの多様なニーズ

小玉(以下、小): 日本医師会女性医師バンクは今年で13年目を迎え、就業成立数・登録者数ともに増加しています。医師の働き方改革においても、女性医師支援の必要性についてこれまで以上に認識が高まっており、追い風の状況だと言えるでしょう。

就業成立数が増えた要因の一つに、体制の変化が挙げられます。2016年度から専任のコーディネーターを配置し、相談とマッチングに加え、就業後のフォロー体制の仕組みを強化しました。相談者と更なる信頼関係を構築してきたことで、就業成立数が増加したのでしょう。

佐々木(以下、佐): 積極的な活動を行っていただき、ありがとうございます。

小: さらに近年では、女性医師の就業支援を超えた、多様なニーズへの対応が期待されています。例えば、シニア世代の医師の就業支援、医業承継支援、産業医のマッチングなどが挙げられます。特に、シニア世代のニーズはこれからますます高まっていくと思われます。24ページでご紹介したように、大阪の開業医の先生がご子息に医業承継した後、無医村で診療したいと女性医師バンクに相談を持ちかけられ、北海道医師会と行政との連携によって就業先が決定したと

いう事例もありました。

佐: もともと本省のセンター事業は、女性医師の求職・復職の支援を目的に始まりましたが、従来考えていたよりも多様なニーズが寄せられているんですね。新たに活躍する場を求めるときの相談窓口の役割を、センター事業およびバンク事業が担っていることは、私も嬉しく思います。

小: 他にも、厚労省から「検疫所の医師を紹介してほしい」という要請をいただきました。私たちの活動に対する、ありがたい応援だと感じました。

■ 性別や年代の垣根を超えて

佐: 今後の事業展開において、どのような課題と対応をお考えですか?

小: 今後もちろん女性医師の支援は続けていきますが、この先は「女性医師」の冠を外してもいいのかもしれない。大きなビジョンとしては、女性医師だけでなく男性医師やシニアなど、医師全体を支援することのできる、全世代型のドクターバンクを目指したいと考えています。

佐: 様々な社会的要請のなかで、男性であっても、介護などの事情で少しペースダウンして仕事をする必要のある人も出てきていますからね。

小: ええ。ただ、全国各地の多様なニーズに日本医師会がすべて対応することは、無理があると思われます。そのため、日本医師会が都道府県医師会との連携を強化するような形でバンク事業を行うことのできる体制を整えていく必要があるでしょう。

佐: 事業が全国に拡大していき、都道府県医師会からきめ細かな情報を得ることがで

きるようになれば、地域のニーズの掘り起こしにも期待が持てますね。

小: はい。例えば、医師が医師不足地域から医師多数地域に移動することは、基本的にはあまり望ましいとは言えません。しかしその背後には、ご両親の介護などといった特別な事情もあるかもしれない。こうした判断の難しい事態に、都道府県医師会と日本医師会が関わることで、医師の偏在といった大きな社会的課題にも対応できるようになると考えられます。

佐: 対象を少しずつ広げて支援をすることが、結果的に地域の課題解決につながるということですね。

小: そして今後、全世代型のドクターバンクとして編成していくにあたっては、広報にも工夫が必要になってきます。これまでは「女性医師」の看板があることで、女性医師は「自分たちのことを支援してくれる」と思っていたことでしょう。他方で、男性医師は「自分には関係ないものだ」と感じていたかもしれません。いざ相談したいと思ったとき、窓口がわかりやすいことは大切ですから、今後はネーミングを含め、周知の仕方を考えなければならぬと感じています。

佐: それに加えて、多様な成功事例を知っていただく機会を増やしたいですね。

小: はい。この冊子自体も、成功事例の紹介という役割を担っていますが、今後もホームページなどで積極的に成功事例を発信していきたいと考えています。

■ キャリアの多様性に対応していく

小: ここまでの話をまとめると、一言で言えば「医師のキャリアの多様性にどう対応して

いくか」ということが、今後の大きな課題だと言えるでしょう。

医局の力が強かった昔と比べ、今は様々な立場の医師がいます。医局は否定的なイメージを持たれがちですが、もともとは医師を保護し、かつ地域医療を守る組織でした。しかし、今は医局に属さない医師もいます。かつての医局の機能が成り立たなくなりつつある現在、センター事業は、再研修やキャリア形成など、医局が担っていた役割を担う必要も出てくるでしょう。

佐: 医局に属さない医師でも、自分に合った職場に巡り会えるよう支援する仕組みが、従来よりも必要とされるようになってきているのかもしれないですね。センター事業やバンク事業が、そうした相談先の一つとして機能していることは、非常に意義があるのではないかと思います。

小: ええ。医師は社会的地位が高いこともあり、他人に悩みを相談しにくい職業とも言われます。身近な人にこそ相談できないという事例も多いそうです。だからこそ日本医師会が、医師が困ったときに安心して相談できる窓口になれるようにしていきたいと思っています。



女性医師支援センター・女性医師バンクの振り返りと展望

日本医師会常任理事

小玉 弘之

厚生労働省医政局医事課長

佐々木 健

日本医師会女性医師バンクは、厚生労働省女性医師支援センター事業の委託日本医師会が2007年から開始した事業です。13年目を迎えたこの事業につい

を受け、女性医師のライフステージに応じた就労支援と医師の確保を目的として、小玉常任理事(写真左)と佐々木医事課長(写真右)が対談を行いました。

…ABOUT US…

～女性医師の就業・復職支援～

日本医師会女性医師バンク

日本医師会女性医師バンクは厚生労働省の委託事業です。

結婚・育児・出産・介護…。女性医師は様々なライフイベントによって働き方に変化が生じます。

女性医師バンクでは女性医師が無理なく、就業を継続するために、一人ひとりのライフステージにあった施設をご紹介します、医師としてのキャリア継続を支援しています。

…POINT 1…

登録～成立まで
費用はすべて
無料

…POINT 2…

専任のコーディネーター
による
サポート体制

…POINT 3…

日本全国、日本医師会の
会員・非会員を問わず
利用が可能

■ まずはお気軽にご相談ください！

☎ **03-3942-6512**
(平日10:00～17:00)

■ 詳しくはWebサイトをご覧ください。

日本医師会女性医師バンク で検索
または、QRコードを読み込み、アクセスしてください。



日本医師会女性医師バンク

TEL: 03-3942-6512 / FAX: 03-3942-7397

WEB: <https://www.jmawdbk.med.or.jp/>

Mail: info-bank@jmawdbk.med.or.jp